

表 2 - 1 1 代表的な群落の地方別構成比

数字は地方別合計値に対する割合（％）を示している。

植生区分	群落名	北海道	東北	関東	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州	沖縄
1	高山低木群落	1.08	0.14	0.10	0.16	0.81	-	-	-	-	-
	エゾマツ - トドマツ群集	7.24	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	エジマツ - ダケカンバ群落	9.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	シラビソ - トウヒ群団	-	-	-	1.17	-	-	-	-	-	-
	オオシラビソ群集	-	1.09	1.10	0.05	1.47	-	-	-	-	-
	コメツガ群落	-	0.04	1.02	0.03	-	0.05	-	-	-	-
	ササ - ダケカンバ群落	6.68	0.10	0.65	0.18	-	-	-	-	-	-
	ミドリユキザサ - タケカンバ群団	0.58	0.25	0.01	0.14	3.81	-	-	-	-	-
4	下部針広混交林	3.28	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	チシマザサ - ブナ群団	1.90	11.53	4.09	1.47	1.58	0.19	-	-	-	-
	クロモジ - ブナ群集	-	-	-	-	-	-	0.06	1.10	-	-
	マルバマンサク - ブナ群集	-	0.02	-	-	5.95	-	-	-	-	-
	スズタケ - ブナ群団	-	0.03	0.42	0.23	-	1.04	-	1.89	0.33	-
	ヤマボウシ - ブナ群集	-	-	1.00	0.26	-	-	-	-	-	-
	ツガ - コカンスゲ群集	-	-	0.10	1.08	-	0.04	-	0.43	-	-
	エゾイタヤ - シナノキ群集	27.86	0.11	-	-	-	-	-	-	-	-
	ハンノキ群落	1.09	0.01	-	-	-	-	-	-	-	-
	自然低木群落	0.00	1.83	0.01	0.01	-	0.08	0.01	-	0.19	-
5	ヒメヤシャブシ - タニウツギ群落	0.01	0.11	-	-	1.88	0.02	-	-	-	-
	ブナ - ミズナラ群落	0.00	5.39	0.71	0.97	8.15	0.68	1.24	-	-	-
	クリ - ミズナラ群落	0.24	11.89	9.88	2.88	4.34	4.10	4.06	0.72	0.01	-
	アカマツ群落	-	0.15	-	0.19	-	0.05	1.05	-	0.01	-
	ササ草原	3.22	0.16	0.22	0.15	0.14	0.06	0.06	0.14	0.04	-
6	ススキ群団	0.33	1.47	0.08	0.34	0.03	0.01	0.34	0.04	0.06	-
	伐跡群落	0.77	0.34	0.67	0.60	0.49	0.56	3.62	0.16	0.03	-
	モミ - シキミ群集	-	0.01	0.01	0.12	-	1.10	0.02	0.63	0.19	-
	ウバメガシ群落	-	-	-	-	-	0.05	-	1.12	0.07	-
	リュウキュウアオキ - スダジイ群落	-	-	-	-	-	-	-	-	1.21	23.88
	オキナワウラジロガシ群集	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	1.22
	ナガミボチョウジ - クスノハカエデ群落	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	2.28
	ガジュマル - クロヨナ群集	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	1.47
	ケナガエサカキ - スダジイ群集	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18.01
	リュウキュウガキ - ナガミボチョウジ群落	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.39
	アカマツ群落	-	1.27	-	-	-	0.02	0.02	-	0.05	-
	リュウキュウマツ群落	-	-	-	-	-	-	-	-	1.97	6.36
	クロマツ群落	-	0.06	-	-	-	0.11	0.08	1.00	0.05	-

植生区分	群落名	北海道	東北	関東	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州	沖縄
7	コナラ群落	-	13.13	5.15	4.77	16.89	9.93	17.47	2.74	1.85	-
	クスギ - コナラ群落	-	-	0.66	0.01	-	0.62	-	1.09	2.13	-
	コナラ - クリ群落	-	-	1.51	3.48	-	-	-	-	0.01	-
	シイ・カン萌芽林	-	-	1.58	4.17	0.24	1.95	1.16	8.26	10.32	2.28
	ウバメガシ - クロマツ群落	-	-	-	-	-	1.00	-	-	-	-
	アカマツ群落	-	0.75	-	0.53	6.50	5.37	0.71	8.67	1.48	-
	ヤマツツジ - アカマツ群集	-	0.32	0.76	0.03	4.88	1.03	-	-	0.81	-
	モチツツジ - アカマツ群集	-	-	-	5.86	-	9.47	2.70	-	-	-
	コバノミツバツツジ - アカマツ群集	-	-	-	0.01	-	-	16.77	2.16	0.03	-
	オンツツジ - アカマツ群集	-	-	-	-	-	-	-	3.31	0.02	-
	クロマツ群落	-	-	-	0.12	0.86	0.30	0.35	2.23	0.42	-
	ススキ群団	-	-	0.42	1.02	0.64	0.11	0.72	0.14	3.32	5.46
8	ヨシクラス	1.37	0.01	0.45	0.06	0.12	0.21	0.16	0.09	0.05	0.57
	アダン - オオハマボウ群落	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.79
9	常緑針葉樹植林	19.5	1.46	0.84	0.05	1.07	0.08	-	-	-	1.63
	トドマツ植林	2.37	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	アカマツ植林	-	5.64	3.07	1.38	0.15	0.27	4.16	0.04	2.23	-
	クロマツ植林	-	0.30	1.01	2.57	0.02	0.73	1.42	0.18	1.65	-
	スギ・ヒノキ・サワラ植林	0.00	10.62	14.51	30.46	13.91	26.64	15.85	37.27	31.70	-
	落葉針葉樹植林	4.83	4.80	4.82	0.32	0.05	0.03	0.10	-	-	-
	外国産広葉樹植林	0.01	0.03	0.01	-	-	0.01	-	-	0.03	1.30
	常緑果樹園	-	-	0.55	1.06	0.02	0.66	0.57	4.68	2.93	0.57
	畑地雑草群落	6.75	4.37	10.61	3.60	1.48	0.62	1.34	2.71	7.66	20.13
	水田雑草群落	3.74	12.31	15.15	11.66	14.75	12.57	12.60	10.94	11.89	0.33
	牧草地	4.85	1.07	0.96	0.73	0.31	0.49	0.77	0.25	1.21	2.93
10	市街地	1.69	1.73	3.93	8.63	2.36	7.07	1.61	2.61	3.84	2.69
	緑の多い住宅地	0.09	0.89	3.33	0.81	1.39	1.00	2.59	0.65	2.24	0.16
	開放水域	0.95	0.77	2.13	1.28	0.15	4.68	0.53	0.57	0.35	0.24
計		91.13	94.07	91.42	92.48	93.63	93.00	92.14	95.82	90.41	94.69
1%に対応するメッシュ数		274	345	153	155	654	132	138	95	183	12

北海道地方は最も自然植生の高い地方であるが、これを特徴づけるのは亜寒帯・亜高山帯のエゾマツトドマツ群集，エゾマツ・ダケカンバ群落，ササ・ダケカンバ群落およびブナクラス域のエゾイタヤ・シナノキ群落である。いずれの群落も北海道に特徴的に出現し，特に前2つの群落は北海道固有のものである。北海道地方ではヤブツバキクラス域の自然植生および代償植生はみられず，植林地・耕作地植生の比率も他の地方に比べて低くなっている。全国的に高い比率を占めるスギ・ヒノキ・サワラ植林がほとんどみられないのも特徴である。

東北地方は自然植生全体の比率においては北海道，沖縄に次いでいるが，その中で最も高い比率を占めているのはチシマザサ・ブナ群団である。代償植生ではブナクラス域のクレーミズナラ群落，ブナ・ミズナラ群落の比率が高いが，ヤブツバキクラス域のコナラ群落も高くなっている。植林地・耕作地植生およびその他の区分が高い比率を占め，全体の約半分はこれらの区分によって占められている。

関東・東海地方では自然植生の比率は低い，1%を超えるものとして，関東地方ではオオシラビソ群集，コメツガ群落（以上亜寒帯・亜高山帯），チシマザサ・ブナ群団，ヤマボウシ・ブナ群集（以上ブナクラス域），東海地方ではシラビソ・トウヒ群団（亜寒帯・亜高山帯），チシマザサ・ブナ群団，ツガ・コカンスゲ群集（以上ブナクラス域）があげられる。代償植生では，関東地方ではブナクラス域のクレーミズナラ群落，次いでヤブツバキクラス域のコナラ群落が高いが，東海地方ではヤブツバキクラス域のコナラ群落，シイ・カシ萌芽林，モチツツジ・アカマツ群集などの比率が高くなっている。両地方とも全体の約7割が植林地・耕作地，市街地などによって占められている。東海地方では特にスギ・ヒノキ・サワラ植林の比率が高く，全体の約3割を占めている。

北陸地方は自然植生の比率は東北地方に次いでおり、亜寒帯・亜高山帯のミドリユキザサ・ダケカンバ群団、ブナクラス域のマルバマンサク・ブナ群集が比較的高い比率を占めている。代償植生ではヤブツバキクラス域の比率が高く、コナラ群落、アカマツ群落、ヤマツツジ・アカマツ群集などが多くみられる。ブナクラス域のブナ・ミズナラ群落、クレーミズナラ群落の比率も比較的高い。植林地・耕作地植生、その他の区分の合計は全体の約3.5割で、これは北海道、沖縄に次いで少ない。

近畿、中国、四国地方はいずれも自然植生の比率は極めて低い。いずれの地方でもヤブツバキクラス域代償植生の比率が高いが、近畿地方ではコナラ群落、モチツツジ・アカマツ群集、中国地方ではコナラ群落、コバノミツバツツジ・アカマツ群集、四国地方ではシイ・カシ萌芽林、アカマツ群落の比率が高くなっている。植林地・耕作地植生およびその他の区分がいずれも高率だが、近畿・四国では5割を越え、四国ではスギ・ヒノキ・サワラ植生の比率がとりわけ高い。

九州地方ではヤブツバキクラス域の自然植生の比率がやや高い。これを構成する主な群落はリュウキュウアオキ・スタジイ群集とリュウキュウマツ群落であるが、これらは沖縄からつづいて分布し、南部の地方に限ってみられる群落である。代償植生ではシイ・カシ萌芽林が高率であるが、自然植生、代償植生を含めても全体の約3割で残りは植林地・耕作地植生および市街地などからなるその他の区分によって占められている。

沖縄地方は全体の半分以上がヤブツバキクラス域の自然植生によって占められており、自然植生の比率は北海道に次いで高率となっている。これを構成する主な群落はリュウキュウアオキ・スタジイ群集とケナガエサカキ・スタジイ群集であり、これらに次いでリュウキュウマツ群落の比率も高い。沖縄にはヤブツバキクラス域の自然植生が多く出現しており、沖縄固有のものも多い。植林

地・耕作地植生およびその他の区分の比率は全体の約 3 割と低いが，そのうち約 2 割は畑地雑草群落である。

自然植生のうち全国土の面積に対する割合（占有率）が 0.1 % 以上となるものを抜き出すと表 2 - 1 2 のようになる。このような群落には 3 1 群落該当し，特に占有率の高い群落はブナクラス域と亜寒帯・亜高山帯の自然植生である。エゾイタヤ・シナノキ群落（占有率 4.9 %），チシマザサ・ブナ群落（同 3.5 %），エゾマツ・ダケカンバ群落（同 1.6 %），ササ・ダケカンバ群落（同 1.3 %），エゾマツ・トドマツ群落（同 1.3 %）の 5 群落によって日本の自然植生の 6 割が占められている。ヤブツバキクラス域の自然植生ではリュウキュウアオキ・スダジイ群落集が最大面積である。占有率は 0.3 % であり，他クラス域に比較して低い。また社寺林などとして残存してきたシイ・カシ自然林の占有率は沖縄・九州に分布する群落を除くといづれも 0.1 % 未満であり，極めて限定された範囲に存在している状況である。

表2 - 1 2 全国の0.1%以上の面積を占める自然植生（集約群落別）

群 落 名	集約	群落コード	メッシュ数	占有率
1 エゾイタヤ - シナノキ群落	*	40300	7666	4.93 %
2 チシマザサ - ブナ群団	*	40100	5482	3.53
3 エゾマツ - ダケカンバ群落	*	20400	2554	1.64
4 ササ - ダケカンバ群落	*	20600	1991	1.28
5 エゾマツ - トドマツ群集	*	20100	1983	1.28
6 下部針広混交林	*	42600	898	0.58
7 自然低木群落	*	41700	682	0.44
8 オオシラビソ群集	*	20501	648	0.42
9 ヨシクラス	*	80300	568	0.37
10 ミドリユキザサ - ダケカンバ群団	*	20800	518	0.33
11 リュウキュウアオキ - スダジイ群集	*	61305	514	0.33
12 スズタケ - ブナ群団	*	40200	489	0.31
13 アカマツ群落	*	61800	454	0.29
14 高山低木群落	*	10100	440	0.28
15 リュウキュウマツ群落	*	63200	439	0.28
16 ササ自然草原	*	21100	429	0.28
17 マルバマンサク - ブナ群集	*	40103	396	0.25
18 ハンノキ群落	*	41500	303	0.19
19 モミ - シキミ群集	*	60100	283	0.18
20 ツガ - コカンスゲ群集	*	40208	229	0.15
21 ケナガエサカキ - スダジイ群集	*	61314	221	0.14
22 ウラジロヨウラク - ミヤマナラ群団	*	21300	203	0.13
23 ヤマボウシ - ブナ群集	*	40201	194	0.12
24 ミミズバイ - スダジイ群集	*	61302	184	0.12
25 シラビソ - トウヒ群団	*	20500	182	0.12
26 コメツガ群落	*	20503	181	0.12
27 ヒメヤシャブシ - タニウツギ群落	*	41703	169	0.11
28 ヤナギ低木群落	*	41300	163	0.10
29 クロモジ - ブナ群集	*	40102	160	0.10
30 ウバメガシ群落	*	61700	154	0.10
31 クロマツ群落	*	61900	152	0.10

今回の植生調査の中で全県をカバーしているのは愛知県 1 県である。そこで愛知県の前回と今回の調査結果を比較し、過年度の植生状況の変化について考察してみる。

植生区分別に両年度の集計結果を対比してみると、表 2 - 1 3 のようになる。調査メッシュ数に違いがあるのは、開放水域（122 メッシュ）、干拓地（41 メッシュ）が今回調査には含まれているため、これらを除くと、総メッシュ数はほとんど変わらない。顕著な変化の見られる植生区分はヤブツバキクラス域の代償植生と植林地、耕地植生、その他の区分である。ヤブツバキクラス域の代償植生の減少は、人工的な色彩の濃い植生区分の増加となって現われている。自然植生のメッシュ数は少なく、一概に論じにくいですが、変化はほとんどみられない。先に述べた人為的な変化は、自然植生の分布域ではなく、代償植生の分布域が中心であると推定される。

さらに詳細に群落別の変化をみてみると、細部の変化には、実際の植生変化のみならず、調査手法上の問題も含まれていることが分かった。出現群落数は昭和 50 年度が 35 群落であるのに対し、昭和 55 年度は 41 群落となり、群落が細分化され、図面描写が細かくなっている。

表 2 - 1 3 愛知県の集計結果の比較

植 生 区 分	昭和 55 年度調査		昭和 50 年度調査	
	メッシュ数	構成比	メッシュ数	構成比
1 寒帯，高山帯自然植生	0	- %	0	- %
2 亜寒帯，亜高山帯自然植生	0	-	0	-
3 亜寒帯，亜高山帯代償植生	0	-	0	-
4 ブナクラス域自然植生	3	0.1	1	0.0
5 ブナクラス域代償植生	58	1.2	11	0.2
6 ヤブツバキクラス域自然植生	23	0.5	24	0.5
7 ヤブツバキクラス域代償植生	589	12.3	868	18.1
8 河辺・湿原・塩沼池・砂丘 植生（各クラス域共通）	14	0.3	15	0.3
9 植林地・耕作地植生（各ク ラス域共通）	3,087	64.4	2,979	62.3
10 その他	1,019	21.2	890	18.6
計	4,793	100.0	4,788	100.0
開放水域，干拓地	163	-	-	-
総 計	4,956	-	4,788	-

開放水域，干拓地のデータは比較から除外した。

(2) 群落の解説

データバンクされた情報を使用して県別の分布図、緯度および標高別の頻度グラフを作成した。これらの図はこれまで分りにくかった群落ごとの分布や生育地の特徴を見出すことに有効である。本報告では、メッシュ数の多い群落と、多県にまたがる群落を抜き出しそれぞれの図を付表 - 9 に掲載した。このようなデータと県ごとの報告を合わせることによって表 2 - 14 に示すような全国的な凡例解説が行なえる。表 2 - 14 は、各植生区分ごとに 1 ~ 2 群落を選び例示したものである。

群落の基準化は、全国レベルの調査や相互比較を実施する上で重要な作業である。現在の群落凡例は、おおよそその基準化が行なわれているもののまだ整理の段階であり、個々の群落の統一した見解を導びくためにはそれぞれの凡例解説を行なう必要があるであろう。

別冊「凡例解説」では 74 の代表的な群落を選び解説を試みた。

(3) 自然公園および保全地域の植生状況

図 2 - 5 , 7 は公園別の植生区分別構成比を示す図である。わが国の公園を植生自然度から大別した報告はすでになされているが、ここでは植生区分別の類型を行なってみた。(各公園の位置は図 2 - 4 , 6 に示した)

自然性の高い公園に着目し、それぞれの植生区分別の構成比を比較してみると次のような類型ができる。

- A . 植生区分の 2 . 亜寒帯・亜高山帯の自然植生が高い割合を占める公園
- B . 植生区分の 2 . と 4 . ブナクラス域の自然植生が、共に高い割合を占める公園
- C . 4 . ブナクラス域の自然植生が高い割合を占める公園

D．6．ヤブツバキクラス域の自然植生が高い割合を占める公園

E．いずれの自然植生も低い割合の公園

A～Eの類型はすなわち，A．針葉樹林によって代表される公園，B．針葉樹林と落葉広葉樹林によって代表される公園，C．落葉広葉樹林によって代表される公園，D．常緑広葉樹林によって代表される公園，E．自然林の少ない公園，というように見なすこともできる。

自然林の割合が70%以上となるような自然性の高い公園について上記の区分を用いて類型化すると次のようになる。

A.....大雪山国立公園

B.....十和田八幡平国立公園，中部山岳国立公園，白山国立公園，
ニセコ積丹小樽海岸国定公園

C.....越後三山只見国定公園，栗駒国定公園

D.....西表国立公園，奄美群島国定公園

また自然林の割合が40～70%の公園も同様に類別すると，Bタイプの公園が多い。Dタイプの常緑広葉樹林によって代表される公園は小笠原国立公園が加わるのみで，全国的にも限られた林況の公園であると言える。

この類型の面積的な比較をするとA，Bタイプの公園は大面積であるのに対し，Dタイプは小面積である。これは自然公園の環境行政にとっては自然性のみならず，その質の問題も重要であることを示唆している。

またEタイプの公園には自然植生が5%未満の公園も存在し，植生からみた自然性はほとんど保たれていない状況と言える。

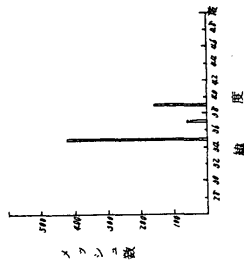
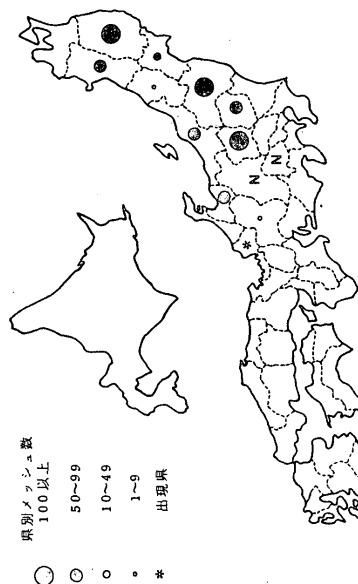
〈畑観〉常緑針葉樹の高木林、亜高山林、群集高は3〜20mとばらばらあり、また巨木から巨林までさまざまな段階のものが見られる。発達した群集では、コケ層が顕著で5層構造となっている。

〈生育地〉亜高山帯、日本海側多雪地帯を中心に広く分布している。冬季季節風の風斜面でよく発達し、時に句配30°以下の緩斜面では巨林となる。また亜高山帯上段附近や湿原の周辺では矮性状となっている。雪崩の発生しやすい風斜面ではほとんど発達しない。

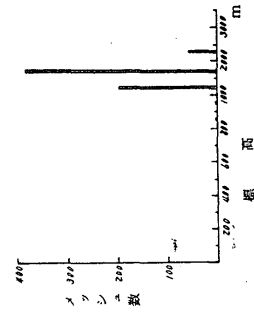
〈植組成〉高木層には、オオシラビンが優占し、東北から北関東にかけては、ヒノキアサナラ、トウヒなど、常緑針葉樹が混生することがある。また東北から北陸にかけての多雪地帯では、ササカマド、サナカマド、サビバナナカマド、オオガサナラ、ミネカエデなどの常緑な葉樹がしばしば混生する。亜高山帯には高木層でオオバスノキなどの常緑な葉樹が混生する。オオシラビンが高木層を形成し、オオカマノキ、コヨウラフツツジ、コシアサナラ、オオバスノキなどの常緑な葉樹やハフワマンソテツ、シロバカマなどの常緑な葉樹と混生する。オオシラビンが高木層を形成し、オオカマノキ、コヨウラフツツジ、コシアサナラ、オオバスノキなどの常緑な葉樹やハフワマンソテツ、シロバカマなどの常緑な葉樹と混生する。オオシラビンが高木層を形成し、オオカマノキ、コヨウラフツツジ、コシアサナラ、オオバスノキなどの常緑な葉樹やハフワマンソテツ、シロバカマなどの常緑な葉樹と混生する。

〈群集の形成〉オオシラビンが優占する高木林、亜高山林である。亜高山帯の日本海側風斜面に広く分布している。青森県から福井、岐阜、静岡県までの北日本本海側に分布している。森林の伐採により腐敗現象が誘発されやすいため、特に影響の大きい北西向、南向斜面の破壊は禁止することが必要である。道路開設の際には根元のうめたりと避ける必要がある。

II. 亜寒帯・亜高山帯自然植生
*20501 オオシラビン群集



コード	群集名	枚数	出現県
20501A	オオシラビン群集	640	青森、岩手、秋田、福島、山形、新潟、長野、岐阜、愛知
20501B	オオシラビン群集	5	山形
計		645	



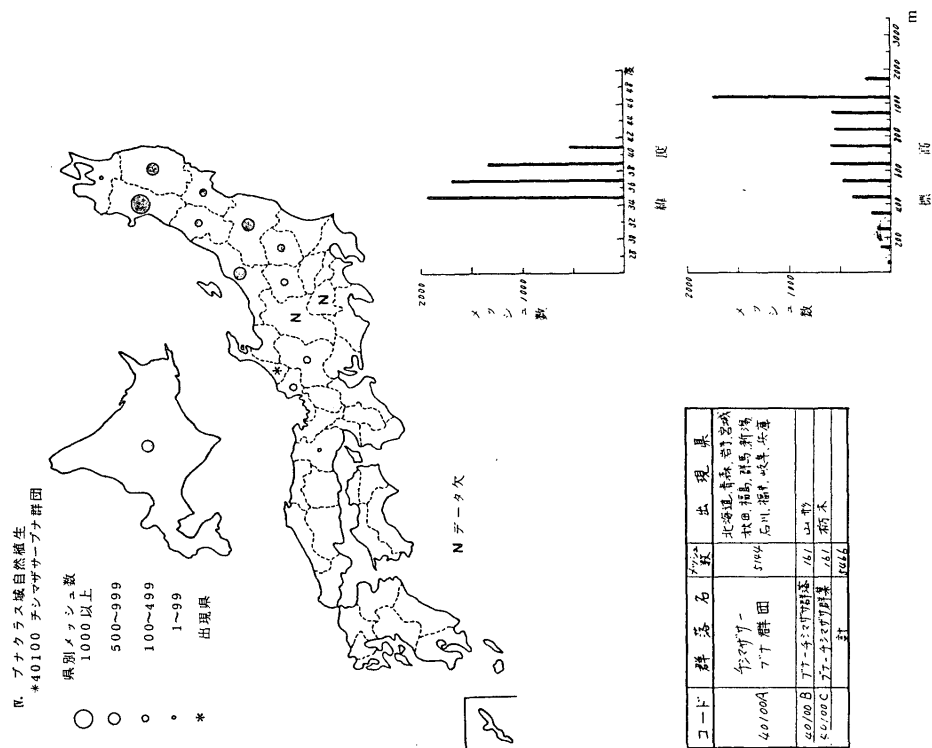
〈相觀〉夏緑広葉樹。高木林。亜高木林。群落高は20~25m程度が多い。

[illegible]

樹山地帯を中心に分布している。北海道黒松内陸地帯以南西、兵庫県まで、日本各地に分布するブナ、榎とすく群落の特殊な地域である。

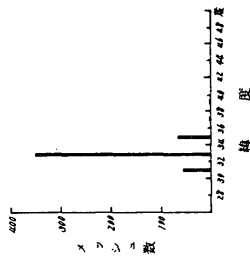
落葉広葉樹高木林である。日本

フロモ、ジャ、ア、平、朱、郎、の、他、種、組、成、的、に、は、お、後、述、する、に、メ、ア、オ、キ、一、群、集、分、
 され、シ、平、朱、郎、の、代、探、が、進、ん、で、い、る、た、め、あ、る、程、度、面、積、の、林、分、を、地、域、
 亮、湖、積、り、に、は、地、形、区、分、に、充、て、シ、統、的、に、保、護、す、る、こ、と、を、必、要、と、
 ありう。

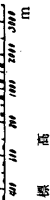


く相親>落葉広葉樹の、高木林、亜高木林、群落高は時に30mに達する。
 く生育地>太平洋側の冷温帯に分布している。山腹斜面の通潤地によく発達するが、山頂や稜線部の強い風衝地や、花崗岩地帯の未熟な土壌条件下にもみられる。地質的には、第三紀層より古い地層に限られ、火山灰土壌にはみられない。
 く複組成>高木層にはブナが優勢し、ミズナラ、イヌブナ、メシヤナラ、ヨブソミ、ネバババなどがみられる。落葉広葉樹が生育している。低木層にはナツツバキ、ヒメコサ、ササなど、ミズナラ、イワガク、ゴトウツツ、コカシ、ノナゴサ、タガネソウ、イワガク、ミズナラ、コカシ、クワ、ササなどが生育している。太平洋側のブナ林は、分布が太平洋側にはほぼ限定されているスズダケ、タンナサワ、タタギ、クロモジ、コハクワ、ワカエデなどを特徴し、区別種としてスズダケ、ブナ群団にまとめられている。
 く群落の排散>太平洋側山地に分布するブナの優占する落葉広葉樹林である。林床にスズダケ、ミヤコササが排散的にみられる。
 く分布>本州の岩手県南部から兵庫県六甲山までの太平洋側山地、四国山地に断続的に分布し、九州大分県にもみられる。
 くその他>複組成的には後述するヤマボウシ、ブナ群集やシラキ、ブナ群集なども同群団に含まれる。日本海側のナシマササ、ブナ群団に対応している。近年伐採により次第に減少している。分属も必要であらう。

*40200 スズカケブナ群団

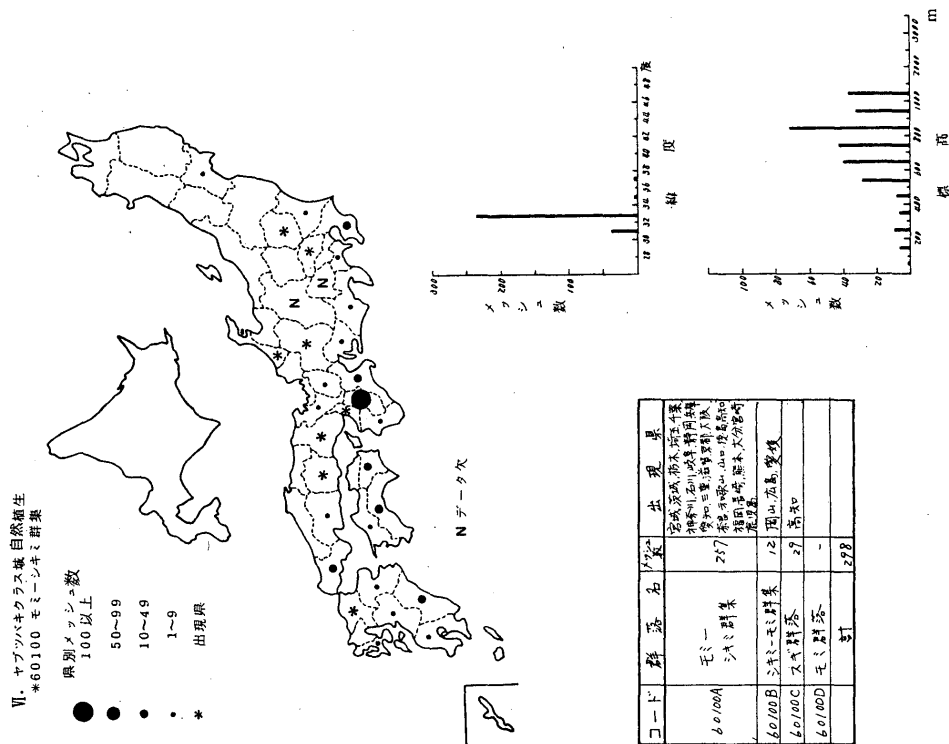


コード	群落名	出現数	出現地
40200A	スズカケブナ群団	326	岩手、宮城、秋田、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、徳島、高松、香川、愛媛、高知、福岡、佐賀、大分、熊本、鹿児島、沖縄
40200B	スズカケブナ群団	18	新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、徳島、高松、香川、愛媛、高知、福岡、佐賀、大分、熊本、鹿児島、沖縄
40200C	スズカケブナ群団	85	熊本、大分、熊本、大分
	計	429	



く相親＞常緑針葉樹。高木林。域上から、ブナクラス域下部に生ずる。アツバツキが中間帯となり、成り立っているものが多い。地域によっては急傾斜地や土壌のうすいや乾性な立地に多く生育している。

カヤノソガシはモミで、ところによって、アツバツキ類や常緑針葉樹のツグハネが混生する。高木層には他にアカサデ、イヌシダ、カタエデ、コハウチワカエデ、ヤマザクラなどの同種がある。豊高の割合は北へいくほど多くなり、ヒサギなども全園的によくみられる。根層には九州ではハイキギ、アサギ、ヤマツバク、ヒサギなどがあり、ムラサキシキリ、ヤブカラサキ、ムラサキシキリの草本層にはヤママシキ、ヒサギなどが全園的によくみられ、ベニシダ、ジャノヒゲなどの群落の特徴）モミ・シキギ、ミヤマシギ、カヤ、イヌギなどの果て際微塵におよぶ分枝として認められてくる。日本南部では落葉広葉樹との混交林と見る傾向にあるが多くの北部では落葉広葉樹との混交林と認められる。残存林分が急傾斜地や尾筋に多いことから、ツグハネノキ、トガツクラ、コウヤマキなどに伴って分布がみられる。この分布より、太平洋側の地域を中心に分布がみられる。



＜相親＞ 常緑広葉樹。低木林。亜高木林。林冠は密に茂り、強風の影をうけ刈り込められ、まうな外観を呈する。しばしば、高木層にぬきんぐで、クロマツとともに生育している。ウバメガシがシートのベラ群集に比べ、表層土のわずかに堆積した立地にみられる。砂浜海岸では砂丘植生の後方に帯状にみられる場合がある。

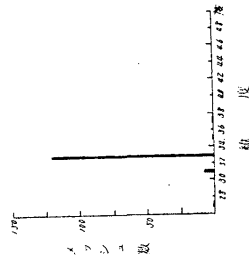
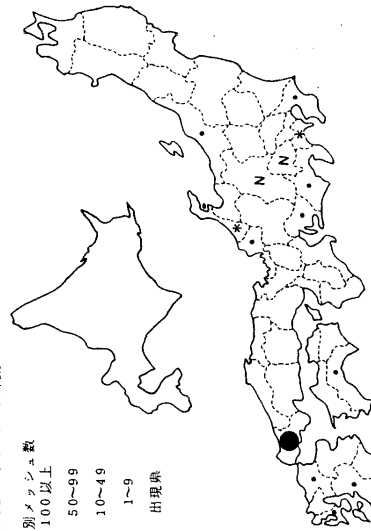
＜種組成＞ マサキ、トベラ、マルバシヤリンバイ、ハマヒサカキなどが林冠を形成し、オニヤブソテツ、ソテツ、コバノタツナミなどが多く出現する。

＜群落の特徴＞ 海岸風衝地。自然亜低木林である。標徴種、区分種としてマサキ、トベラ、ツワブキ、オニヤブソテツ、マルバシヤリンバイ、イタビワ、マルバズミなどがあげられている（宮脇ら 1978）

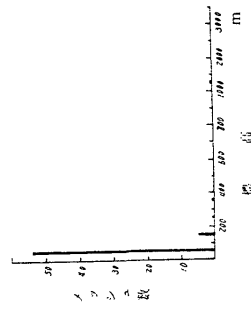
＜分布＞ 関東、北陸から九州まで各地から報告されている。ウバメガシ——温暖地がウバメガシの生育可能域、伊豆半島以西の温暖地に限られるのに対し、マサキートベラ群集はより広い分布域を有している。

*61702 マサキートベラ群集

根別メッシュ数
● 100以上
● 50-99
● 10-49
● 1-9
＊ 出現地



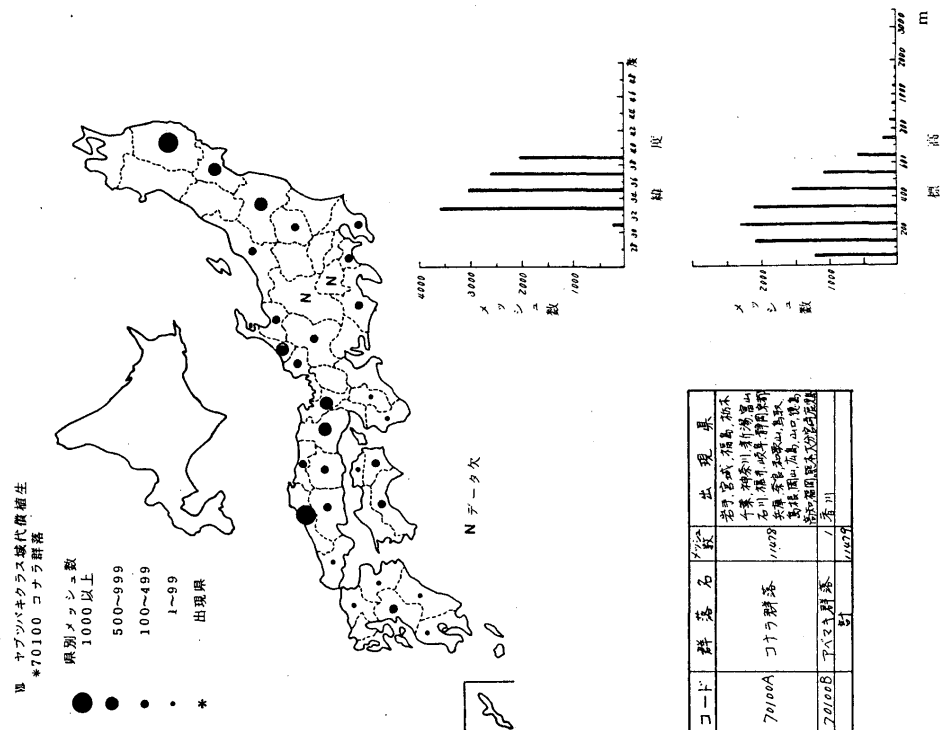
コード	群集名	メッシュ数	出現地
61702A	マサキートベラ群集	136	神奈川県横浜市、静岡県静岡市、静岡県浜松市、静岡県豊田市
61702B	トベラマサキ群集	2	千葉県高知
61702C	マサキートベラ群集	0	石川
	計	138	



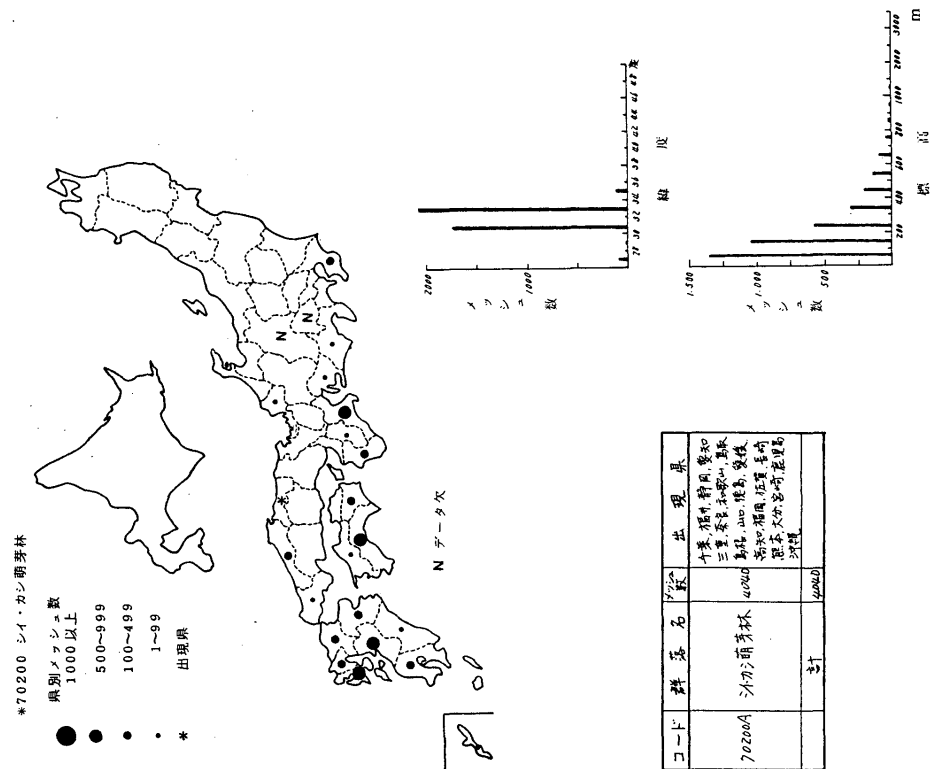
[illegible][illegible]

コナラ林はアカマツ林と並びが代表的な二次林であり、古くから薪炭林として利用されてきた。50年開闢時代伐採され、萌芽更新によって維持されてきたが、近年人爲の影響で、減少、墨枯の進行しているものが多い。コナラ林の組成は地域や立地により、さまざまであり、群集の形成がなかなかに困難なのが現状である。コナラ群落は、フヌギ・コナラ群集・コナラ・オニシバリ群集、コナラ一りり群集などに同化されるものや、性格のはっきりしないものも一括している。ヤブツバキ・フラス上部・コナラ林の一部はコナラ一りり群落として分けられており、フヌギも多くの含むものは、クダギ・コナラ群落として分けられている。

＜全相＞ 東北のから九三三まで広く分布する。こ



〔相親〕 常緑広葉樹の、高木林、亜高木林、低木林。
 〔生活地〕 ヤブツバキ域で、スダジイ、コジイ、
 カシ林の成立する地域。
 〔種組成〕 高木層には、スダジイ、コジイ、アラカシ、
 アカガシ、シラカシ、ウラジロガシなどが優占する。ハゼ
 高木層にはこれら自然林の構成樹種の他、コナラ、ハゼ
 ノキ、カラスガシ、アカカガシ、ヤブツバキ、ヤマザ
 ク、ニッケイなどが常緑樹やコナラ、リウウブ、ヤマザク
 の混生する。亜高木層には、ヒサカキ、ヤマハハルシなど
 の出現率が高い。草木層には、ヤブコウジ、ヤマカサズ、ヘニ
 シギなど、出現率が高い。優占種や構成種は地域や立地
 条件後の年数などにより異なる。低木層には、自然林に近
 似した常緑植物の比率が高い。
 〔群集の形成〕 自然林の、カシ林が伐採されたに
 後、荒れ地に二次林で、萌芽によって更新している林分
 である。若い林分では落葉樹が多く、コナラや樟樹に
 れて類似している。年数がたつほど常緑樹
 の割合が高くなり、林母木が開いてくる。近年は新炭
 林として伐採される機会が少なくなり、ために、自然林に
 近づいている。海岸近く、内陸まで広が
 っている。



〈相観〉 高茎草原
 〈生育地〉 海岸の塩沼湿地、河口付近、河川の下流、中流域の湿地、沿岸の低地から山地まで、広い優占群落の立地は泥質または砂泥質で、常に停滞水があるところである。ヨシは生育適応範囲の広い植物で、強酸性の海岸埋立地の湿地にも群落を形成する。
 〈種組成〉 ヨシフラゲなどの大形スゲイなどの群落。他にカサスゲ、アサスゲ、サシカフイ、シククイなどの群落も含まれている。一般に優占種は1〜2種で、上層を光とコエビの単純なものが多く、北海道や東北地方で多々みられる。ヨシや大形スゲの優占群落にミズゴケ類、ミズトクサ、ミズカサ、ミズバネ、ヨシヨシなどがある。流れる、池沼の周縁や河川の下流域など泥質地で水、マコモ、ワトイなどの群落。子ガヤ、ススキなどの群落。ヨシにサギ、河口付近や塩沼地ではヨシ、サンカクイ、シバフラゲなどの生育する群落がみられる。
 〈群落の特徴〉 挺水植物によって構成される底層草原の形態をとるものが多い。
 〈分布〉 北海道から沖縄まで広く分布している。
 〈生育地〉 自然植生としてのヨシクラスの群落は、小規模のものだが各地にみられる。河口付近や河川流域などの大規模な群落は、人々の影響を受け、破壊されているものが多い。

Ⅷ. 河辺・塩沼・埋立地・砂丘・橋生(各クラス縦共通)

*80300 ヨシクラス

県別メッシュ数

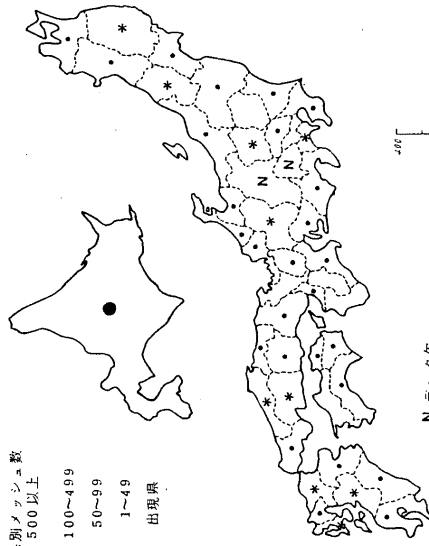
500以上

100~499

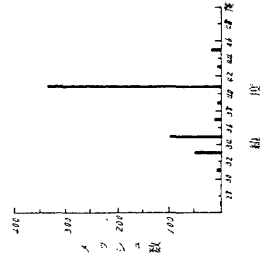
50~99

1~49

出現県



Nデータ



コード	群 落 名	メッシュ数	出 現 県
80300A	ヨシクラス	565	北海道、青森県、岩手県、秋田県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県、香川県、高松市、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長門県、大分県、熊本県、鹿儿岛県、沖縄県
80300B	ヨシ群落	3	徳島県、香川県、高松市、愛媛県、高知県
80300C	低草群落	0	三重県、熊本県、鹿儿岛県
	計	568	

*14歳で2群落以上出現する場合、メッシュ数のもとより、群落

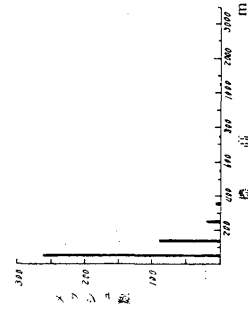


图2-4 国立公园位置图

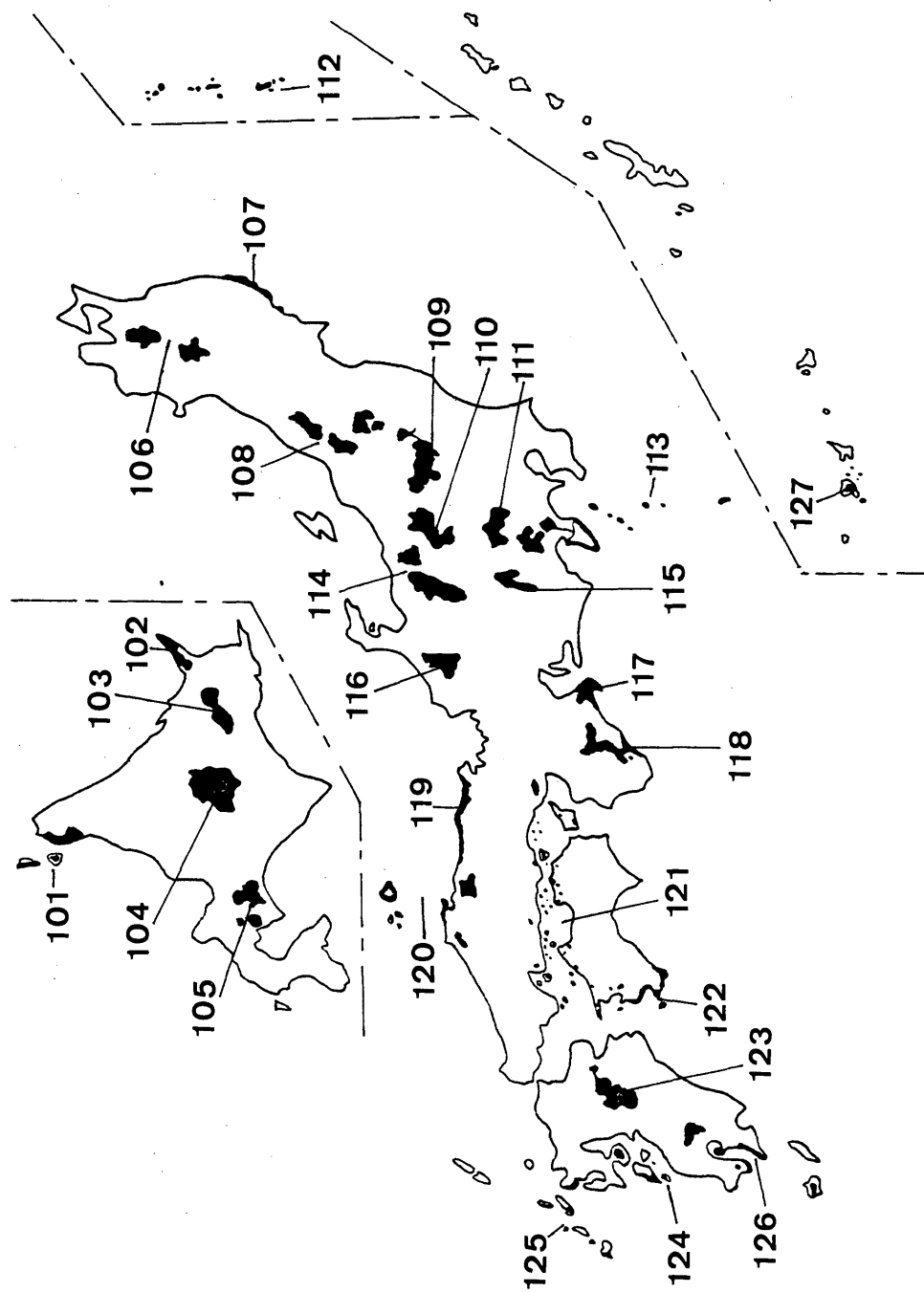
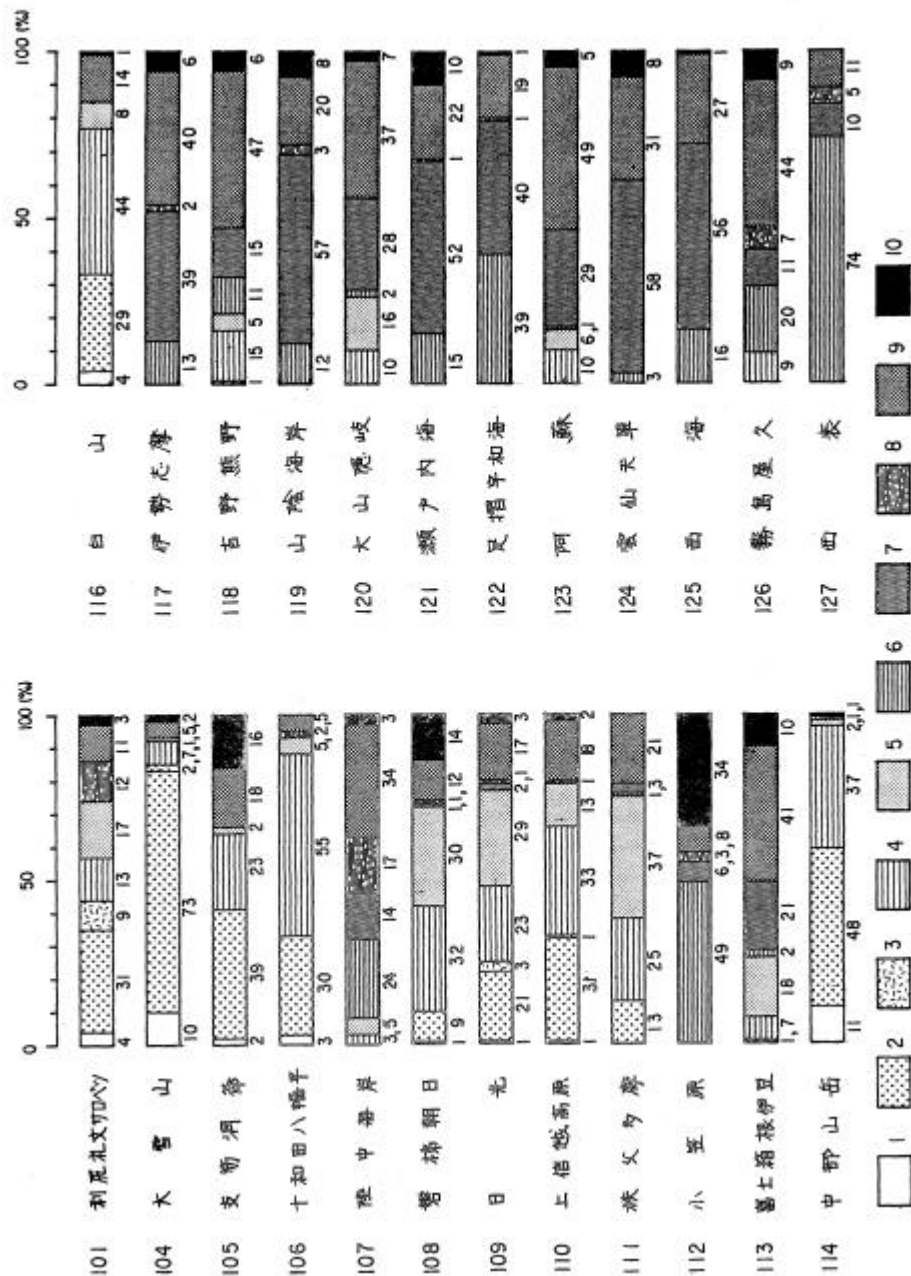


図 2-5 国立公園別植生区分構成比



1. 奥多摩山岳自然植生
 2. 奥多摩・奥多摩山岳自然植生
 3. 奥多摩・奥多摩山岳自然植生
 4. アヅバキアラス域自然植生
 5. アヅバキアラス域代償植生
 6. アヅバキアラス域自然植生
 7. アヅバキアラス域代償植生
 8. 河辺・河原・塩沼地・砂丘植生（各アラス域共通）
 9. 塩沼地・耕作地植生（各アラス域共通）
 10. その他

图 2-6 国定公园位置图

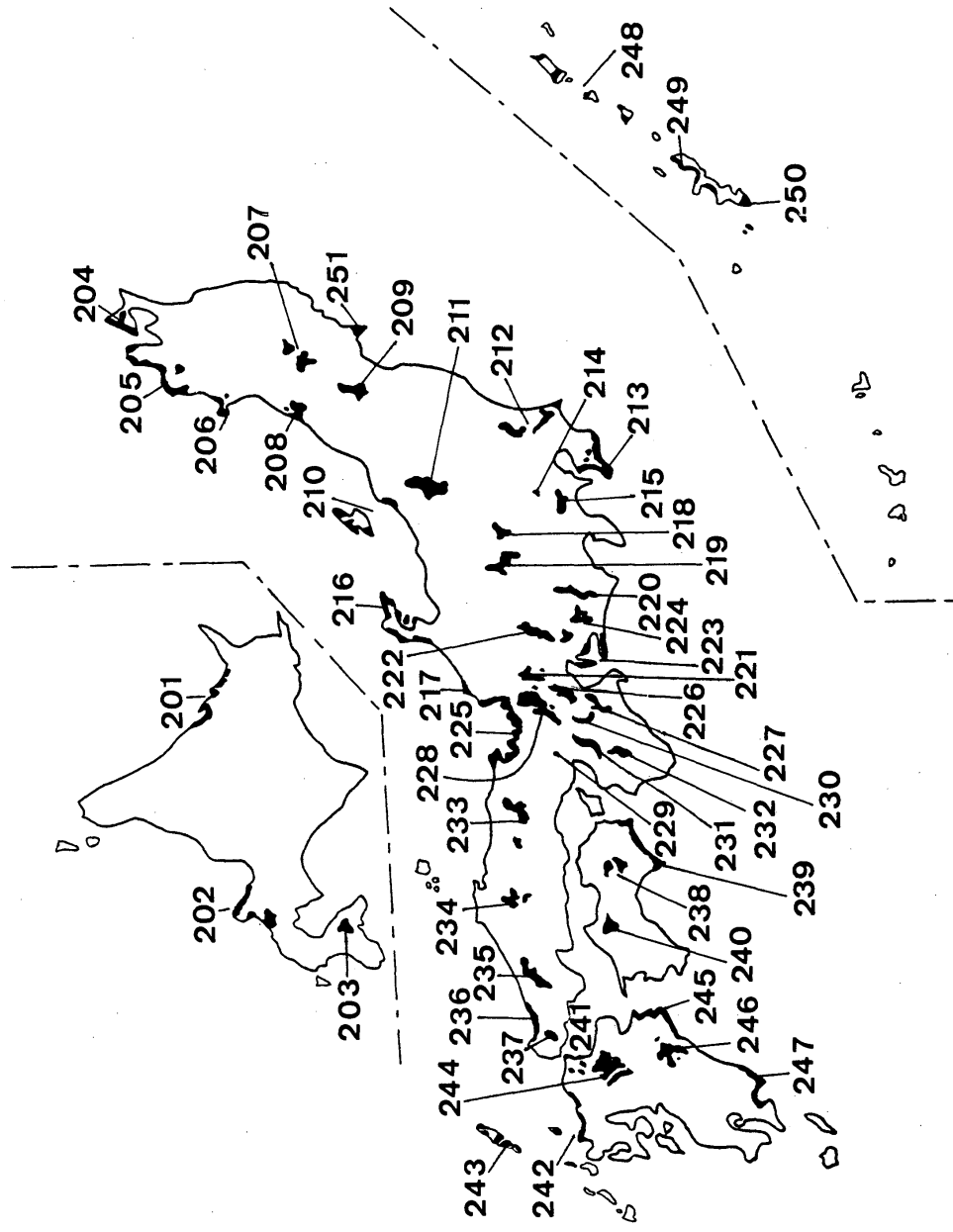
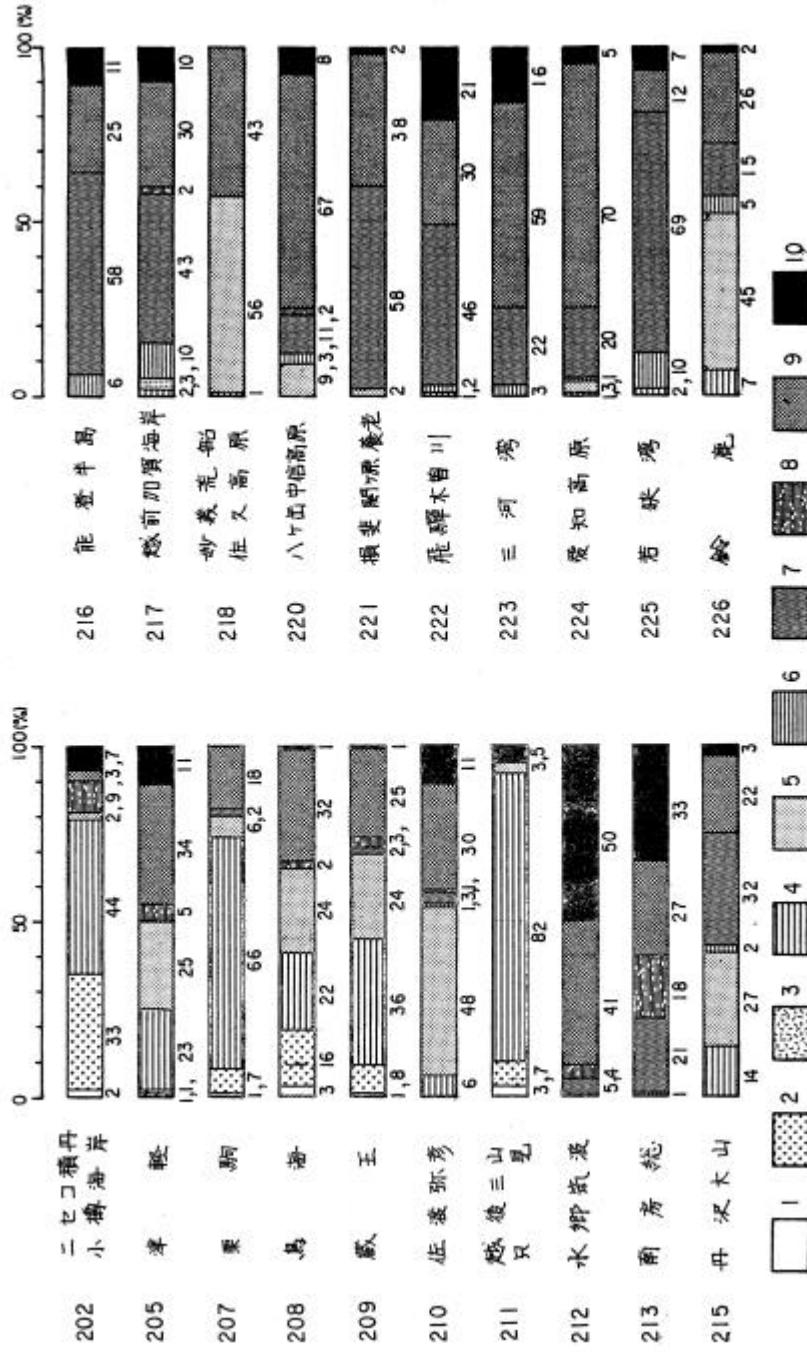


図 2-7 国定公園別植生区分構成比



1. 奥 野・高 山 野 自 然 植 生 4. プナ クラ ス 域 自 然 植 生 7. ヤブ ツバ キ クラ ス 域 代 償 植 生 10. その他
 2. 奥 野・高 山 野 自 然 植 生 5. プナ クラ ス 域 代 償 植 生 8. 河 辺・湿 原・塩 沼 地・砂 丘 植 生 (各 クラ ス 域 共 通)
 3. 奥 野・高 山 野 自 然 植 生 6. ヤブ ツバ キ クラ ス 域 自 然 植 生 9. 植 林 地・耕 作 地 植 生 (各 クラ ス 域 共 通)